

厚生科学研究補助金（子ども家庭総合研究事業）
乳幼児身体発育基準のあり方に関する研究
総括研究報告書

主任研究者 加藤則子（国立公衆衛生院母子保健学部乳幼児保健室長）

研究要旨 乳幼児身体発育値の意義として、母子保健の課題を探る大きな要素となることが明らかになった。研修会に出席した保母に対して調査を行ったところ、発育状態に応じた保育の実践との関連性を十分に理解していないことがわかり、実践と理論との格差が認められた。発育値利用上の留意点を明らかにし、データのまとめ方の観点と、個別の発育対応の観点から、いくつかの提案を行った。また、近年肥満傾向児ややせ傾向児が増加していることに留意が必要であることが分かった。新しい平滑化のソフトにつき、厚生省調査とほぼ同様の規模のデータが得られたとする場合のシュミレーションを行い、良い結果が得られた。さらに、市町村における乳幼児健診の場での身体計測の実態調査を行ったところ、健診にかかわる人員の状況は、地域の実情を反映していた。計測手技については、前回の発育調査の手引きと異なる方法を取っているところがかなり多いことが分かった。

A．研究目的

新しい乳幼児身体発育値作成に関する研究にあたって、乳幼児の発育値の意義、調査の施行や発育値作成上の問題点、活用状況について把握をしておく。

最近新しい平滑化の方法が開発されたため、これを試用することにより、前回調査の時の平滑化に関する問題がどの程度解決するかを検証することを目的とした。

発育値作成のためのデータの精度を知るため、市町村における乳幼児健診の場での身体計測が実際どのように行われているかを明らかにする。

B．研究方法

保育施設での発育値の活用に関しては、乳児保育研修会に参加した保母から聞き取った。平滑化の試行に関しては、厚生省心身障害研究で収集した出生より14カ月までの縦断的乳児身体計測データから、系統抽出法によって、厚生省の発育調査とほぼ同数になるようにデータを抽出した。市町村乳幼児健診の実態調査に関しては、市町村の規模別に層化して、系統抽出法により対象市町村を設定、無記名自記式調査票法を用い、郵送により送付回収した。

C．結果と考察

乳幼児身体発育値の意義として、母子保健の課題を探る大きな要素となることが明らかになった。保育施設では、乳幼児における発育評価の意義の理解は必ず

しも十分とはいえない。経時的評価の実施は必ずしも多くの施設では行われていないことが分かった。基準値のよりよい求め方としては、分布値を求める日齢幅を短くして求めたり、計測値を平行移動させた値から求めたり、出生体重別の基準値を作成するなどの方法が提案された。

2000年調査を行うにあたっての問題点としては、サンプルサイズの問題、基本的母子保健事業の市町村移譲に伴う健診体制の変化、集計・平滑化について、幼児健康度調査の主体について、計測項目の必要性の確認、出生体重の減少、母子健康手帳のグラフの表示について、肥満児の増加、発育基準の表し方として言われていること等が挙げられた。

近年栄養と運動のバランスがうまくとれなくなったことにより肥満傾向時が増加しており、また逆に近年のやせ願望の社会的風潮によりやせ傾向児も増加していることに留意が必要であることが分かった。

試用した平滑化ソフトは、厚生省乳幼児身体発育値作成のための平滑化に適切なものであると判断された。幼児期まで含めての検討が次年度の課題である。市町村乳幼児健診の実態調査からは、健診にかかわる人員の状況は、地域の実情を反映していた。幼児の生活に関する調査等の追加の問診については、規模の大きいところの方がやりにくい状況であることが分かった。計測手技については、前回の発育調査の手引きと異なる方法を取っているところがかなり多いことが分かった。